

別紙様式

紹介したい「成功した試み」

〔試み名〕 胸部単純レントゲン写真読影のための放射線科医師（助教）の増員

〔主担当部門〕 病院長・副病院長会議、放射線科

〔試み概要〕 胸部レントゲン写真で肺癌病変の発見が遅れるというインシデントを契機に、これまで担当診療科の主治医が読影していた入院時の胸部レントゲン写真を、放射線医師 1 名を増員し放射線医師が読影することにした。

〔試み詳細〕

- 背景：過去数年にわたり、複数の診療科の外来及び入院で、断続的に精査加療中であった患者において、肺癌病変の発見が遅れた事例が経験された。後方視的に過去の胸部レントゲン写真をレビューすると異常所見が認められたが、その診断は放射線科や呼吸器内科の医師以外では困難なものであった。この背景には、本院では数年前から、入院時ルーチン検査（原則、外来で実施）である胸部単純レントゲン写真の読影は、各診療科の主治医が行うことになってきたことがある。そのは、放射線科医師による読影はその専門性から CT や MRI を中心に行われていること、診療報酬上も胸部単純レントゲンの放射線科医師による読影は算定できないこと、胸部単純レントゲン写真は医師であれば読影できるであろうという前提等がある。
- 目的：（外来で実施した）入院時胸部レントゲン写真を、専門家である放射線科医師により読影してもらえる体制を整備し、病変の早期発見を可能にする。
- 対象・期間および方法：平成 21 年 4 月 1 日から放射線科医師により、入院時胸部単純レントゲン写真の読影を開始した。ただし、主治医は電子カルテ上で、読影依頼を入力する必要がある。
- 結果（傾向や感触も可）：平成 20 年 5 月（本体制導入前）の放射線科医による入院患者の胸部単純レントゲン読影件数は 628 件、未読影件数は 1177 件であったが、平成 21 年 5 月（本体制導入後）には放射線科医による読影件数は 1639 件、未読影件数は 506 件（放射線科医による読影を必要としない 3 診療科分）となった。
- 評価・考察：放射線科医師による胸部単純レントゲン画像の読影は、これまで一般の診療科医

師からは望まれていた体制であり、また放射線科医師にとっても胸部単純レントゲン画像の読影の重要性は認識されていたが、これまでは放射線科医師のマンパワー不足の理由から困難であった。放射線科医師の1名増員を図ることによりこれを可能にし、専門家による質の高い胸部単純レントゲン画像の読影が可能になった。定量的評価は困難であるが、従来の体制に比べ、異常所見の発見や診断の精度が向上されることが期待される。

・備考その他：特になし。

〔成功した要因（と思われるもの）〕

病院横断的多職種ピアレビューである医療クオリティ審議委員会において、本件事例の構造的な原因である胸部単純レントゲン画像の読影の難しさ、複数の診療科で経年的に患者の病態や画像をフォローアップしていく際のピットフォール等について委員全員で認識し、実効性のある対策を検討し、実施することができた。

〔問題点（あれば）〕

予算措置と人材確保を伴う対策である。

〔他大学で試みる場合の注意点、その他留意点〕

人件費と人材確保を必要とするものであり、インシデントを経験した診療科から放射線科に依頼し決定できる内容ではなく、病院長・副病院長をはじめとする病院幹部の理解と意思決定が必要である。